

『老人と海』覚え書

小堀三郎

『老人と海』が数多くのヘミングウェイの作品にみられる作家精神の遍歴の上に立つものであることはいうまでもない。『老人と海』についてのフィリップ・ヤングの指摘¹⁾はJ. P. サルトルが『『異邦人』解説』の中で彼の文体に言及したさいの「ヘミングウェイの文体はヘミングウェイ自身である」²⁾という指摘と完全に一致する。この両者の指摘はヘミングウェイの文学が文体と思想との不可分一体の融和の中から開花したのものとしてヘミングウェイの世界の本質を鋭くついでているものとみることができる。

『武器よさらば』の主人公フレデリック・ヘンリーが暗い戦争体験のさなかに「栄光、名誉、勇気、神聖などの抽象的な言葉は不潔だ」³⁾と吐露し、戦争の連帯行動を脱れて、一人心中に締結した「単独講和」(Seperated Peace)以来、『河を渡って木立の中へ』や『誰がために鐘は鳴る』をくぐりぬけた果てにヘミングウェイが描きあげた『老人と海』には、作者自身の抽象的なものに対する不信感と生活の中の具象的なものに対する素朴な愛着がこもっている。そしてそれはそのまま共同体が掲げる表象に対する不信感であり、彼の心情でもあろう。あらゆるものが不信の対象となるとき究極的に信じられるものは自己の心情以外にあるまい。とすれば『老人と海』はヘミングウェイ自身の世界であり、老人サンチャゴは作者の自画像といえるかもしれない。

そもそも個人の共同体への帰属とはいかなることで

あろうか。共同体は共同体として存立の意志をもつ限り、その存立の基盤としてあらゆる個人が参与し、共通の意味づけを行なう高い価値に支えられた表象を掲げる。これがもとではあらゆる個人は同時に共同体の構成員でもある。いわば共同体の帰属とはその表象の権威の承認と個人の精神的方位の確定に他ならない。このことは共同体の表象を否認することが異端への転落であり、いかなる支えをももたぬ個人に立つことを意味する。この種の意識の覚醒が必然的なものである限り、異端への転落もまた不可避的なことである。フレデリック・ヘンリーが選んだ道を「老人」は耐えることによってその単純な生をみずから普遍的人間像にまで高めた。それには高級な観念は何一つない。あるのは肉体の力であり、素朴な人間愛であり、リゴリズムであり、忍耐力である。その総和のうちにわれわれは原始的生命を見、儀式の心を見ることが出来る。

☆

『老人と海』はその文体と構成においてきわめて単純である。修飾語もほとんどなければ、心理的理由を表わす接続詞も使われていない。しかし、この単純さは物見高い「旅行者」の傍観的態度で臨もうとすれば非情なまでに拒絶的である。このことは文体が「ヘミングウェイ自身」であるとすれば、そのまま彼の人間性の表出であり、いわば、内面的世界を無遠慮に剔出することを忌む“ハード・ボイルド”なヘミングウェイの厳しいストイシズムといえるものでもあろう。したがってそこから彼の閉ざされた性格の一面を看取することも可能かもしれない。『老人と海』は生の営みをいかなる目的からも解放し、生きること自体を最高価値とみなしてそれを謳いあげる原始的生命への限りない共感に漲っている。海を舞台にした一人の老人と大魚との格闘がその主題であり、副人物として未だ社会の価値観や「言葉」に毒されていない未成熟な少年がただ一人登場するにすぎない。

サンチャゴと呼ばれるこの主人公はメキシコ湾流で小舟で漁をする孤独な老人である。彼はすでに84日間

1) Philip Young, *Ernest Hemingway A Recollection*, A. Harbinger Book, Harcourt, Braces World, Inc., New York p. 125. *The Old Man and the Sea*, in manner and meaning, is unmistakable Hemingway.

2) Jean-Paul Sartre, 『『異邦人』解説』『シチュアシオン I』(邦訳), 白水社, 93頁.

3) E. Hemingway, *A Farewell to Arms*, Bantam Books, p. 137. "Abstract words such as glory, honor, courage, or hallow were obscene beside the concrete names of rivers, the numbers of regiments and the dates."

も不漁の日が続く、そのため最悪の状態を意味する「サラオ」の別名をうけて登場する。老人は自分の過去を語らない。身体全体にとどめている痕跡だけが無言のうちに彼のこれまでの長くて苦しい生活を生き抜いてきたことを物語っている。

「老人の身体はやせこけて、項のところには深い皺が刻まれていた。両頬には熱帯の海に太陽が反射してできた皮膚癌を思わせる褐色のしみがあつた。しみは顔の両側の下にまでおよんでいた。両手の深い引っ掻き傷は綱で釣った大魚をとらえるときにできたものだ。しかし傷はどれ一つ新しいものではない。魚の棲まない砂漠の侵蝕のように古いものであつた」⁴⁾。

この特徴はなによりも彼が海を舞台とする生活者であることを雄弁に物語っている。一方小舟の帆はあたかも彼の現在の「サラオ」ぶりを象徴して「永遠の敗北」を物語っているかにみえる。しかし「海と同じ青い色」をした不屈の眼差しは肉体に刻まれた過去の重みとはいちじるしい対照を示す。「永遠の敗北」と「不屈の眼差し」との対照的特徴が「サラオ」なる老人の個性を見事につくりあげている。

修飾のない文体で描かれる老人の生活場面には不要な修飾物はいっさいない。持ち物といえ、ぎりぎりの生活に必要な小舟と「グアノ」と呼ばれる棕櫚の芽の粗いさやでできている丸太小屋であり、その中あるものはベッド、テーブル、椅子、それに炊飯の場所であり、壁には亡妻の遺品という「イエスの聖心」と「コーブレの聖処女」の絵がかかっているにすぎない。

老人は孤独の生を営んでいる。彼は「少年に漁を教えてきたし、少年は老人を愛している」。少年は不漁の40日目に両親の言いつけで彼の舟を離れはしたものの老人を「一番えらい漁師」だと信じている。海という自然の中での「師と弟」の間は素朴な愛と信じあう心の絆で結ばれている。

「(以前) 87日間も不漁でどんなだったか憶えているだろう、それから僕たち三週間の間毎日でっかいやつを釣ったじゃないか。」

「憶えているとも」老人は言った。「お前がわしの舟を離れて行ったのはわしの腕を疑ったからでないことぐらいわかっているよ。」

「僕を離れるようにさせたのはパパなんだ。僕は子供だし、パパの言うことには従わなくちゃいけない

んだ。」

「わかってるさ」老人は言った。「それが当たり前のことなのさ。」

「パパには信念がないんだね。」

「そうだ」老人は言った、「でもわしらにはある。そうじゃないかな？」⁵⁾

少年の親への従順さは「サラオ」を甘受する老人の姿勢と軌を一にし、少年の老人への信頼感は老人の眼差しにみる不屈の生気に対応する。その生活態度の従順さと生活行為の自律性において彼らの信念は生活上の平均的な被膜に覆われ、他者の目には奇異な形で映ることはない。老人はなによりも素朴な生を肯定し、それを愛する。作者は純化されたこの素朴さを持ち前の筆致で知的な要因から守り続ける。知的なものの介入とともに抽象化が始まり、概念化され、素朴な生命のもつ息吹きと血潮が失われることを見越しているからであろう。孤独な、そして不運が連続する漁生活の中でも老人は不満も怒りも呪いも示さない。目的から解き放たれたとき生に残るものこそ「現在」であり、より高次の目的のための「一過程」という名の蹂躪から解放される時「現在」は現在自身の生を息吹く。たとえ不運の鬱積であろうと現在の生がある以上、老人にとってはそれがもっとも確実なものでなければならない。このことから呪詛や憤怒はおのずからその確実さを裏切ることになる。そのときには「サラオ」はもはや“運”によるものでなく、意識的にしろ無意識的にしろ自然の営為の背後にある秘められた力を「意図」として観念化してしまう我執の台頭をみることになる。しかし老人にはそのような我意我執はない。素朴さからくる鷹揚さがあるばかりである。

テレイス軒で腰をおろしていると多くの漁師仲間が彼をからかうが彼は怒らない。彼の姿を見て悲しむ年老いた漁師もいたが彼は頓着しない。彼の話の相手はいつも少年である。

「はじめて僕を舟にのせて連れて行ってくれたのはいくつときなの」

「5つときだ、いきのいいやつを釣りあげたときお前はすんでのところ殺されるところだったぞ。やつは舟をばらばらにしてしまうところだったよ。憶えているかい？」

「憶えているよ、尻尾でバタバタ、バンバンやってさ、横木が折れてしまったことや、やつに棍棒をくらわせた音なんかをさ。濡れた巻綱のあるへさき

4) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea*, Charles Scribner's sons, New York, pp. 9-10.

5) *Ibid.*, pp. 10-11.

に僕を突きとぼしたり、ボート全体が揺れる感じだとか、おじいさんが樹を切り倒すみたいにやつに棍棒をくわす音だとかそれに僕の身体じゅうに甘い血の匂いがついちまったことなど、僕、憶えているよ。」

「本当にそんなこと憶えているのか、わしが話してやったことじゃないのか？」

「二人ではじめて一緒に行ったときからみんな憶えてるよ。」

老人は陽焼けした信頼深げなやさしい眼差しで少年を見た。

「お前がわしの子ならば、連れ出していちかばちかやってみるんだが」老人はいった、「でもお前はお前の親父の子だし、お前のお袋の子だ、それにお前は運のついてる舟に乗ってるからな。」⁶⁾

老人は極貧状態にありながらも待つ態度に悲愴感はない。運はチャンスにある。運に対して老人がなし得ることは待つことであり、それに対して準備をすることではかないが、彼にとってそれは成果の中に還元し切れぬ重要な生活態度となっている。彼の待つ態度の悠揚さも、生气の中にもみるチャンスに臨んでの決意も彼の準備的な生活態度の真摯さと密着したものといえる。これが少年との会話においては単純さとなり、また寡黙となって表われているが、逆に確信を支えとした内面的生氣を物語るものともなる。このことは彼の生活上の貧しさも、彼に対するからかい、同情も彼の心性を損うことがない事実によって明らかである。むしろ老人の豊かな精神性と不屈の眼差しの前では現実とフィクションとの区別すら消失してしまう。

「何を食べる？」少年はたずねた。

「魚のまぜごはんにしよう。お前も食べるかい？」

「僕はいい、家で食べるから。火を起こしてあげようか？」

「いいよ、後で自分で起こすから。飯は冷たいのを食べてもかまわないんだ。」

「投げ網を持っていてもいいかい？」

「いいともさ。」

投げ網などなかった。少年はいつ売ってしまったかも憶えていた。しかし二人はこんなつくりごとを毎日繰り返していた。米も魚もなかった。少年はそのことも知っていた⁷⁾。

この「つくりごと」の中に身を置いて自己を演ずる

かぎり、「つくりごと」は彼にとってそのまま現実であり、自己の二分によって生ずるおかしみもあるはずがない。老人は自からいうように「一風変っている老人」なのだ。そしてその「一風変っている老人」の心の中に同じ信念によって入り込んで「つくりごと」の世界を遊歩する少年もまた「一風変っている少年」でなければならない。老人が自然そのものとしての海に孤独の生活を耐えていられるのはその「一風変っている」点にあり、そしてそれはまた「海と同じ青い色」をした彼の眼の輝きでもあるのだ。

少年は老人から野球の話聞くのが好きだし老人も少年の求めにこたえて話して聞かせるのが好きだ。野球は二人の素朴な日常的話題である。野球の心が彼らの心を引きつけるのだ。

「アフリカの話をしようか、それとも野球の話がいいかい？」

「野球の話がいい」少年は言った。「ジョン・マックグロウの話聞かせてよ」彼はJのことをジョータと言った。

「彼は昔よくテレイス軒にきたものだ。でも酒を飲むと彼は荒れておめくし手に負えなかったよ。気持は野球だけでなく競馬の方に向いていたな。少なくともポケットにはいつも競馬のリストを持っていて、電話でよく馬の名前を喋っていたよ。」

「あの人はえらいマネージャだった」少年は言った、「お父さんの考えじゃ、あの人が一番えらいんだって。」

「しょっちゅうここに姿をみせたからさ」老人は言った、「ドローチャが毎年かかさずここに姿をみせていたら、お前の親父は彼が一番えらいマネージャだと思うだろうよ。」

「本当のところ一番えらいマネージャは誰なの、ルーク、それともマイク・ゴンザレス？」

「おなじようなもんだらう。」

「でも一番えらい漁師はおじいさんだね？」

「いや、他にもっとえらいのを知ってる。」

「ケ・ヴァ (Qué va)」少年は言った、「うまい漁師も沢山いるし、えらいのも少しはいるけど、本当にえらいのはおじいさんだけだ。」

「ありがとう。おまえはわしをうれしがらせる。わたしたちの考えが間違ってることになるほどのでかい魚が現われないよう祈ってるよ。」⁸⁾

6) *Ibid.*, pp. 12-13.

7) *Ibid.*, p. 16.

8) *Ibid.*, pp. 22-23.

老人にとって野球は限られたルールのもとで行なわれるたんなる限られた世界ではない。たとえつくりごとの世界であろうと、そのルールの精神は“限られた世界”を超えて人間としての真摯さを競技者に要求する。野球の競技者たることは老人が漁師たることであり、彼らのグラウンドにおけるルールは老人の漁生活におけるルールに等しい。ルールの権威のもとではあらゆる行為が等価であり、価値に上下はない。これは一言にして儀式の世界であろう。ヘミングウェイが老人の素朴な日常生活を儀式的世界にまで高め得たのは、日々の生活の現在性を未来の隷属から解放し、これに対する自己集中とそこに生ずる緊迫感とによって生活行為の現在性を見事に復権しているところにある。老人は「えらい漁師」と「うまい漁師」とをはっきり区別している少年の言葉を聞いてうれしく思う。儀式の心を持つものだけに通じあう言葉である。老人と少年は「うまい漁師」という言葉の中に、生活目的の高みから日常的態度を見下したのを感じ、いわば日常性が生活目的のための奉仕の位置に落としめられ、そのために日常から儀式的尊厳が抹殺され、その心が死んでしまっているのを感じとっているように思われる。

ルールは個人的なものであろうと社会的なものであろうと行為、行動に関して虚構を担うものである。だから人間の本質的価値決定がルールにおいてなされる以上、いかなる行為、行動の価値も虚構の総和の上に成り立つことになる。とすればマックグロウは彼らにとって失格だ。「えらい選手」は同時に「えらい人間」でなければならない。そのことは「えらい漁師」がそのまま「えらい人間」でなければならないことでもある。大ディマジオはたんに「すぐれた選手」というだけではない。その虚構的ルールに則してプレーする彼の心に「人間」を、いわば自己集中の表われとして単純化された行為に人間の偉大さをみているのだ。自己抑制に根差したこの単純化に榮譽を賭けることが真のプレーヤーに不可欠の態度であることは作者が『午後の死』の中での闘牛競技に関する熱っぽい主張⁹⁾をみれば

9) Ernest Hemingway, *Death in the afternoon*, Charles Scribner's Sons, New York, p. 232. "A great killer (=bullfighter) must to kill; unless he feels it is the beet thing he can do, unless he is conscious of its dignity and feels that it is its own rewards, he will be incapable of the abnegation that is necessary in real killing. The truly great killer must have a sense of honor and a sense of glory far beyond that of the ordinary bullfighter. In other words he must be a simpler man.

ば明らかとなる。

☆

老人は85日目の出漁に備え、小屋で眠りライオンの夢をみる。夢の中には死んだ妻も少年も現われてこない。早朝に床を離れ、少年から幸運を祈る言葉を受けて漁に出る。港の出口にできれば舟はみんなばらばらだ。老人はいま海上で一人の観衆もいない孤独な「競技者」となる。自然の掟のもとで生を営む点において、海のあらゆる生命は平等だ。しかしここは力の世界でもある。いま老人は舟の周辺を飛ぶ飛魚を一番の友だちだと思う。そして人間よりも辛い生活を送っている鳥たちに対しては可愛そうだとも思う。

「海が残酷にもなれるというのに、何故鳥たちをあつちの海燕のようにきしゃでひ弱なものに創ったんだろう。海はやさしくとても美しい。でもとても残酷にもなる。突然そうなるんだ。物悲しげな小声をあげて潜ったり餌を求めながら飛ぶ鳥たちは海に対してはあまりにもきしゃにできてる¹⁰⁾」。

だが海自体にとってはその「やさしさ」から「残酷さ」への変容も結局「どうしようもない」ことなのだ。「ひ弱な海燕」に対する老人の同情も、「どうしようもない」この海の変容を共に耐えて生きて行かねばならない運命を分かちあうところに根差している。この海の残酷さを生の営みの上で運命として甘受するとき老人の海は、『白鯨』のエイハブ船長が「叡知」を通してとらえた海¹¹⁾、すなわち人間の諸価値を無関心的に拒みあらゆる人間的行為を太古以来の沈黙のうちに呑み込んでしまったあの海とはまったく異質のものとなる。

彼(老人)は海をいつもラ・マル (la mar) と考えていた。これは人々が海を愛しているときに呼ぶスペイン語だ。ときには海を愛してる連中も悪しざまに言う、けれどその口ぶりはいつも海が女性であるといわんばかりだ。浮きかわりにブイを使い、鮫の肝臓で大金が入ったときに買ったモーターボートを持つ若い漁師の中には海を男性形のエル・マル (el mar) で呼ぶものもいる。そんな連中は海が闘争相手か仕事場か敵でもあるかのような口ぶりだ。しかし老人はいつも海を女性と考え、大きな恵みを与えたり引込めたりするものと考えた。もし海が荒れ狂って非道いことをしたらそれは海にはどうしようもないことだからだ。月が海を支

10) *Ibid.*, *op. cit.*, p. 29.

11) 拙稿「狂気への意志」『流通経済論集』, Vol. 6, No. 2, 1971年, 106-18頁.

配するのは女性を支配するのと同じようなことなのだと思つた¹²⁾。

老人がラ・マルを口にするとき、自分の生命を生み育んだ母に対する響きがある。それはまた故郷を慈しむ心の表われでもある。「やさしさ」と「残酷さ」は本来母性のものであり、この意味で老人と海との結びつきはフィジカルなものといえる。老人は獲物を期待して舷側に突き出た3本の棒が傾くのを待っている。彼はこれまでチャンスの到来にそなえて準備だけは整えて日々待ち続けてきた。「待つ」ことは老人の生活の上で耐えなければならぬ哲学であり、それは「ラ・マル」が老人に教えた生活の知恵でもある。待つ身が報われるか否かはまったく未知だ。だが未知の時間においてこそはじめて運の可能性が生まれる。したがって運を待つことは老人にとって未知に対する万全の準備であり、緊張した行為でなければならない。だから彼は「少年と一緒に漁に出たときには必要なときしか普通しゃべらなかつた。二人がしゃべつたのは夜か悪天候のために舟が足どめになったときだ。海ではいらぬおしゃべりをしないことが美德とされていたし、老人もいつもそう考えてそれを守つた。」¹³⁾これは偉大な野球選手がプレーに臨むさいの、また偉大な闘牛士が死に隣接した闘技を行なうさいのあの真剣な心に通じるものであろう。老人にとって日々の新しさはチャンスを真剣に待つこの心構えのうちにあるのであり、この態度を通してチャンスを捉えるとき彼の漁は儀式へと高められ老人の誇りを満たすものとなる。すでに彼は舷を越えて飛びこんできた魚を「愛情のつもりでその頭をたたいて足でどけ」ることのできる老人になっている。今は野球のことを考えるときではなく、ただ一つのこと「生れてきた目的」だけを考えるとときだと彼は思う。

☆

正午ごろ老人は綱にかすかな手ごたえを感じる。やがて大きな重量感となり、老人は綱をのぼし予備綱をもほぐす。魚がとてつもなく大きいことがわかる。85日目むかえたこのチャンスにおける老人と大魚は闘牛場における闘牛士と猛牛である。ルールによって緊迫を高めた生と死だけがそこにはあるだけだ。老人と魚はいままったくの互角であり、作者はこれを意図して1本の綱で二者とも等位に立つものとして魚をも it ではなく he でうけている。観衆のない生死を賭した

行者に頼れるものは肉体の力だけであり、共に孤立無儀式の施援に立っている。肉体の生命に対して厳然とあるのは死だ。この死の意識によって肉体的生命は内面において止揚され得る。老人にみる肉体的生命の緊張感はそのまま、止揚された内面的生命の表出でもある。作者の原始的生命への憧憬には死の意識が絶えず胸中を去来しているといわれる由縁であろう¹⁴⁾。緊張のさなかで老人は「いまは耐えぬこと以外は考えまい」と努める。闘いのうちに夜をむかえ星を眺めながら老人は思う、「きょうの大リーグはどうなったか」「ラジオで聞けたらすばらしいだろうなあ。」魚との長い闘争のため彼の意識はくずれかける。しかしいま彼が身を置いている状況の中での意識の緩みは儀式のルールに反する。だから老人はすぐさま自分について聞かせる、「いま自分のしていることを考えろ。おろかなことは考えるな。」老人は待ち続けてきた魚との出会いから漁師の身の宿命的孤独感を感じる。彼は繰り返して「あの少年がいたらなあ」と口ずさむ。老人には「現在」が確実な世界のはずである。過去が悔いとして現在の意識に登場するとき「現在」はあるがまものものではなく、変質されたものとして映し出されてしまう。「現在」の確実さを揺がせる要因は追放されなければならない。にもかかわらず、「あの少年がいたらなあ」と老人が繰り返すことは、少年の不在が彼の確実な「現在」における唯一の欠如感、すなわち信じあう心による人間的連帯を離れた孤独感を意味しているとみることができよう。

闘いの2日目をむかえ身心の疲労はいつそう加わる。しかし頼り得るものは自分の力だけだという意識が老人を励ます。彼はまず「強くなければならぬ」という意志で生魚を食べ続ける。しかし突然左手に走ったひつつりに対しては素直な祈りを忘れない。「ひつつりが治りますように」と呟くのだ。獲物が舟よりも2呎も大きい巨軀に啞然としながらも老人はこの大魚を捕えることによって人間の偉大さを示してやろうと決意を新たにす。ルールに忠実なものにしてルール内の自由ははじめて許される。

「でもおれはやつを殺してやる」彼は言った、「やつがどんなに立派でどんなに見事なやつだって。」

そりゃいいことじゃないけれども、と彼は思った。しかしおれは人間というものがどんなことをなし得るか、どんなことにも耐えていくのだということ

12) *Ibid.*, *op. cit.*, pp. 29-30

13) *Ibid.*, p. 39

14) John Killingley, *Hemingway and the Dead Gods*, University of Kentucky Press, p. 25.

やつに教えてやるのだ。

「わしは一風変わった老人だとあの子に話したっけ」彼は言った、「いまこそそれを証明しなければならぬときだ。」

4度もそれを証明してきたが何の意味もなかった。いま再びそれを証明しようとしているのだ。機会はむかえるたびに新しいものなのだ。そうした過去のことなど老人はけっして考えなかった¹⁵⁾。

過去への追憶は現在の意志を不能にしてしまうものだ。老人は追憶をいま新たな体験で甦らせようとしている。追憶が現在と異質の世界であり、そこに老人一般の内的特質をみるとすれば、彼はやはり「一風変わった老人」といえるであろう。老人は過去が甘い観念の逃避的世界であることをみずから許さない。いつも現在に、現在の力に仕するものでなければならないのだ。大魚との苦しい闘いのさなかに彼を勇気づけるのは、昔、カサブランカで波止場一番の力持ちと言われるニグロの大男とやった腕相撲である。まる一日の勝負に耐え、指の爪から血が滲むほどの凄惨な戦いの末「エル・カンペオン」となった。彼はいま、「その気になりさえすればどんなやつでもやっつけられる」という自信が甦ってくる。「エル・カンペオン」の栄誉をもたらした右手への信頼感に対して、彼の自尊心を傷つけ、いままたひつりを起こした左手には「いつも自分を裏切る」という不信の気持が根強い。生を力の発現とみなす老人には、事態にのぞんで彼の自恃心を裏切るものよりも、正面から対抗する力によりいっそう強い共感を感じずにはいられない。

「すると彼(老人)は何も食べていない大魚がかわいそうに思えてきた、しかしやつを殺してやるという決心は憐れむ気持にもかかわらず緩むことはなかった。これ一匹でどれほど沢山の人間の腹を肥やせるだろうか、彼は思った。しかし連中にはこの魚を食う値打ちがあるだろうか。ありやしない。いうまでもないことだ。あの振舞、あの立派な威厳のある態度からみて、やつを食う値打ちのある人間なんて一人としていやしない。

本当のところわしにはそんなことはわからない、老人は思う。我々が太陽や月や星を殺そうとしなくてもいいことはうれしいことだ。海で暮して本当の兄弟だけを殺していれば充分なのだ」¹⁶⁾。

力の対立に老人は兄弟の心を見る。憐憫の情はその

対立性を希薄化するだけでなく、心のルールに反することにもなる。ルールに忠実であろうとするとき、老人は力に抗らう感情を振り切って自己に徹し、残酷にならなければならない。そうすることが自尊心を満たすことになり、同時に敵対的な生の力に対する敬愛の態度ともなるからである。老人と魚との間の張りつめた綱はそのまま彼らの緊張関係である。無雑作にたぐり寄せれば綱はたちどころに切れてしまう、老人にはよく解っている。老人は眠りたいと思うし、後の戦力に備えたいと思う。老人が突然まどろみから覚めたのは綱の緊張が破れ、魚が暴れ、ボートが激しい力で引きずり廻されたときだ。これは老人が待ち望んでいた事態だが、そのときにはすでに3日目の朝をむかえている。

回遊する大魚の姿をまともに見ることができる頃にはその疲労もその極に達し、口も渴いて声も出ず、水の瓶に手を出すこともできない。しかしこの状態の老人が大魚に対する賛嘆は彼がみずからは気づかぬままに自己の射影に対して向けられているように響く。

「魚よ、お前はこれをおれを殺そうとしているな、老人は考えた。だがお前にはその権利がある。わしはなあ、兄弟よ、お前ほど立派で、美しく、落ち着いていてそして気品のあるやつをこれまで一度も見たことがないぞ。さあ、おれを殺せ。どっちがどっちを殺したって構いやしないぞ」¹⁷⁾。

生と死の最後の接点において老人と大魚との秘かな儀式は最高潮に達する。力とルールが緊迫を盛り上げている。いずれが欠け、また緩みをみせてもならない。「老人は綱を緩め足で押え、高々と鉅を持ち上げて力まかせに振り下ろした。」吹き出す血潮は海の青さを真赤に染め雲のように拡がって行くとき二者の間の儀式は終りを告げる。

儀式の終了とともに俗事がこれに続く。あるいは世俗にあるがゆえに儀式が可能であり、また必要であるのかもしれない。老人が儀式の緊張から解き放たれて、「にいさん、さあ仕事にかかった」「戦いが終わったら下司の仕事がしこたま待ってるぞ」という言葉の中に老人の生に対する厳粛な気持が、同時に作者の人生観がこめられている。老人の「下司」の言葉に秘められた人間の精神の崇高性は可能的な死が惹らす生の緊迫を耐えかつ生きる力にあるように思われる。生から死が、死から生が失われているところに自己を投企する価値を老人はみていない。だからいま生を絶たれて舷側に横たわる魚は「下司根性」の餌食にすぎない。た

15) *Ibid.*, *op. cit.*, p. 66.

16) *Ibid.*, p. 75.

17) *Ibid.*, p. 92.

だ戦い抜いたことに対する畏敬と愛着があるにすぎない。それは老人の心の中では誇りとして名誉として満足感を満たしているのだ。力の余影を残す魚の巨軀は老人が自身の心に潜む俗念を自嘲するのを促すごとく、あるいはそれを嘲笑するように収益計算を掻き乱してしまう。

こいつは見たところ1,500ポンド以上はあるわい、老人はそう思った。それ以上あるかも知れない。1ポンド30セントの割合で、この3分の2がとれるとしたら？

「こりゃあ鉛筆が要るわい」老人は言った……¹⁸⁾

頭がもうろうとする中で老人は最後の仕上げに備え体力をつけるために生海老を食べる。夢の中の出来事ではないかと錯覚する彼に現実感を悟らせるのは両手の傷であり背中への痛みである。この肉体的感覚がなければ、この凄絶な格闘も夢中劇と思われたかもしれない。老人は現代的知性の重圧に呻吟する肉体的生命の復権においてこそあるべき人間の姿があり、萎えた肉体からは不屈の意志は生まれてこないという作者の思想を沈黙のうちに担っている。またこれは知性万能の信仰のもとに作りあげられた現代の価値観に対していわば、知性の確実性への信仰に立つ世界観への懐疑が忘却の淵に追いやられ、そこに構築された知的優位の世界観に対して肉体的生命の復権への意図が明らかに潜んでいるものと思われる。この作品の中で老人がサンチャゴと、また少年がマノーリンと固有名詞で呼ばれるのはほんの数回にすぎず、ほとんどは「老人」であり「少年」である。固有名詞の使用によるこの世界での行為の固有的価値の主張を控えている意図は十分に汲みとれる。老人の生が知的なものに彩色されていないのはたんなる偶然ではない。われわれは知性の媒介によって成り立つ抽象的観念に対してフレデリック・ヘンリーが吐露した「不潔感」をみているし、不潔感がそもそも生理的・肉体的なものである以上、その直接的原因となる抽象的観念に対して肉体が喚起されるのもまた当然といえる。老人の素朴な生は概念化されない、抽象化を拒絶する原始的生命の世界への回帰が目指されているとみるべきであろう。いまわれわれは肉体的苦痛の中に自己本来の生命を覚え、また肉体を通してしか考えることのない孤独の老人の姿に人間本来の生命の原型を発見することができる。

☆

老人が大魚に抱いた畏敬と愛情は、いま舷側に横た

18) *Ibid.*, p. 97.

わる獲物を狙って襲撃してくる鮫に対して激しい嫌悪と侮蔑の感情へと急変する。鮫は姿態と攻撃力において完璧である。この鮫に対する老人の感情は『武器よさらば』の中で逃走兵士たちを「裏切り」のかどでみずからはなんの危険に身をさらすことなく冷然と銃殺刑を行なう野戦憲兵に対する作者の秘められた感情に似ている¹⁹⁾。血の匂いを嗅いで獲物に迫る大きな鮫についてこう述べている。

「それはとても大きなマコ鮫だった。海中のどんな魚にも劣らぬ早さで泳げるように生れついている。顎を除けば一点非の打ちどころのない美しさだ。背中はかじきのように青く腹は銀色で肌はなめらかで美しかった。大きな顎以外はかじきと同じような体だ。顎は突き出た背びれで水を一直線に切って水面下すれすれのところをす早く泳いでいるときにはしっかりと閉ざされていた。二重にしっかりと閉ざされた唇の内部には歯が八列になって内側に向っていた。ピラミッド型の普通の鮫の歯とは違う。カリッと合わせると人間の指のような恰好になる。老人の指の長さほどもあり、それが両側にかみそりのような刃先をもっていた。海の魚という魚を食いつくすために造られており、す早さ、力強さそれに見事な武装からほかに敵はもたなかった²⁰⁾。

鮫の完全な武装と狙った獲物は逃さぬ鋭い攻撃能力は老人の肉体的思考からみれば生のルールを踏みこえたものであり、自らは死を賭けることなく、ただ与えられた力のもとに護られている。ルールはなによりも個の行動を律する権威をもつものでなければならぬ。老人が大魚に兄弟の心を感じたのはルールの権威に立った生の力と意志の総和をその格闘にみたからであった。また儀式にまで高められ、誇りをみたしたのもそれ故であった。鮫は老人のこの心認めない。フレデリック・ヘンリーが軍規と「不潔な言葉」に身を固めた将校の態度にみたものを老人は傍若無人に振る舞う鮫の姿にみている。彼が水中に飛び込んで銃殺刑を脱れることのできたのが最後に残された肉体の力であったように老人がいま鮫に対して最後に信じ得るものとしてあるのは焦悴し切った肉体の力だけである。

19) Hemingway, *op. cit.*, p. 169. "We stood in the rain and were taken out one at a time to be questioned and shot. So far they had shot every one they had questioned. The questioners had that beautiful detachment and devotion to stern justice of men dealing in death without being in any danger of it."

20) *Ibid.*, *op. cit.*, pp. 100-101.

鮫を攻撃しながらも老人は「希望はなくあるのは決意でありまったくの敵意だけ」しかもたなかった。ルールによって結ばれた「兄弟」の親愛感はルール違反者の出現によっていっそう強まる。魚がやられたとき「自分自身がやられたかのように」感じてしまう。鮫を打ち殺したあと彼の眼差しにみた「人間は負けるようには作られていない」「殺られるかも知れないが負けはしないのだ」という不屈の精神力が「あれが夢の出来事だったら、魚が釣れなかったらよかった」という感傷を放逐してしまう。負けることが死を意味することは自然のルールだ。敗者に対しては閉ざされた世界だ。「殺られ」ても「負けはしない」といわせるのは彼の倫理であり思想である。それは「つくりごと」の権威への服従の心でもある。だから鮫の殺しかたについて「大ディマジオがあのだやり口を認めてくれるか」どうかは老人にとってけっして冗語ではなく真剣な自問なのだ。老人が罪について自分に問い返すとき、罪は彼の世界では消化できない異物のように頭の中をころがる。

「罪なんてわたしにはわからん。信じてるかどうかもはっきりしない。魚を殺すのは多分罪だろう。たとえ自分が生きるためであり多くの人に食わせるためであってもそうだろう。でもそれならみんな罪だ。罪のことなんか考えるな。第一遅すぎるし、そうやって金を貰ってる人だっているんだ。連中に考えてもらえ。おまえは魚が魚に生まれついてるように漁師に生まれついているんだ。聖ペドロも大ディマジオの親父のように漁師だったぞ²¹⁾。

しかし彼はさらに罪を自分に語りかける。

「お前が魚を殺したのは生きるために食料として売るためだけじゃないぞ、彼は考えた。お前がやつを殺したのは誇りのためでありそしてお前が漁師だからなんだ。お前はやつが生きてるときに愛していたし、死んでからだって愛してるじゃないか。やつを愛してるんなら、殺したって罪にはならないんだ。あるいは一層罪になるかな²²⁾。

老人はこれに対して大声でいう、「じいさん、お前の考えすぎだ。」愛することも殺すことも等しく真摯な生活行為となっている老人の場合、罪は行為の後に続くものでなく、逆に行為に先立っているといえる。ルールの順守精神、掟への忠実な態度が老人の逆説的罪として成立している。老人の肉体的思考の中ではこ

れが意識されない。罪の観念が空転し、「考えすぎ」に帰着してしまうのは彼の行為が完成しているときに、その罪が無自覚的に贖なわれているからである。老人はこの世界の「あらゆるものがなにか他の物を殺して生きている」非情な事実を美化する言葉を持たない。ただ「考えすぎ」が「自分を騙すことになる」という危惧の観念によって本能的主張を貫こうとしているのだと感じられる。ここにわれわれがみる原始的生命の新鮮さは知的優位性のもとに見下されてきた肉体自身の沈黙の言語の発見によるものであろう。

さらに一連の鮫の攻撃で銛を奪われナイフを失った老人は獲物の4分の1を台無しにされ魚を釣ったことの無意味さを悟る。感傷と意志は交互に彼の心を占める。さらに予想される鮫への攻撃用具の不足に対し「今は手元のないものを考える時ではない。手元にあるものでできることを考えるのだ」と自分の力をかき立てる。「現在あるもの」がもっとも「確実なもの」であり、信じられるものだからだ。それはまた老人の一貫した態度として彼の生活を貫いている。

闇をむかえ、「死んだような気がする」彼の生命感を支えているのは体の苦痛、純然たる生理上の痛みであった。潮流に乗り部落の燈火が遠くに見える頃彼の格闘の報酬は骨しか残っていない。

試みが挫折し失意のうちに人の気を求めて足取りが向かうところは普通「家」であり、「故郷」といえるかもしれない。そこには共同体の表象を分かち合う仲間がおり「兄弟」がいるものである。老人は燈火の見える潮流に乗って「家に帰ったってどうということはない」と思う。高い意気ごみもなければ虚しさの響きもそこにはない。共同体への帰属を脱れ、自己の小宇宙に留まって充足感によってこれを満たそうとするリゴリズムと自恃心とが健やかに感じられるだけだ。体の痛みと、肌に触れるものが老人の心に訴える。「風は友だちだ」と思うのもそのためだし、身体を休めてくれるベッドを恋しく思うのもそのためである。

「ベッドはおれの友だちだ。ベッドだけだ、彼は思った。ベッドってやつはすばらしいもんだ。ひどい目にあったときなどは居心地がいいもんだ、彼は思った。どれほどいいものかこれまで知らなかった²³⁾。ひどい目にあわせたのは何んなのだ、彼は思った。

彼をひどい目にあわせたのも、ベッドの居心地の良さを教えたのも老人の「ラ・マル」なのだ。力で対抗

21) *Ibid.*, p. 105.

22) *Ibid.*

23) *Ibid.*, p. 120.

する敵と心を慰める友が共存共棲する無言の調和的世界こそ彼の母なる海であり生活の場でなければならない。老人が魚との格闘を一場の無言劇にすぎないといわんばかりに「おれはただ遠出をしすぎただけさ」という無表情な言葉には海の非情な諸事実とそれを償う優しい愛情とを静かに肯定する心があるに違いない。彼の行為には証言者がいない。いるとすれば少年の心が見ざる証人である。彼が暗い港に着いたときも彼を出迎える姿は一人としていない。トレイス軒の燈火は消えており村人はみんな寝ている。老人にはこれでいいのだ。あの格闘を厳しい生の一事実として老人の人生哲学の中に解消し去ったあとではこの村の寝静まった様子も日常の静かな繰り返しの一幕でしかないのだ。老人は黙々とマストを外し帆をまき、かついで坂道を登って行く。これはどこか、訴えることも期待することもなくひたすら現在を耐えて生きる顕微鏡的世界特有の静けさに似ている。

☆

老人は深い眠りにおち入る。朝、少年は老人の寝姿を見て泣く。少年の涙は老人の心の証人であり、老人への信頼であり愛情である。二人の心は信じあっているものだけが理解できる世界を形成している。だが素朴な共感、素朴な一体感以外のいかなる知的要因によって作られているものでもない。「お前がいなくて淋しかったと」という老人の言葉は少年の涙の心と同質のものだ。それが呼応するとき「師と弟」も「老人と少年」も消失し、ただ赤裸々な人間の心と心が、素朴な信頼と愛情に結ばれた純真な「人間」があるばかりである。対象を捉える眼差しでこの心をつまようとするかぎり、きわめてシニカルな結果になることは一団の旅行者がトレイス軒に現われたときみられるように明らかである。女が巨大な魚の白骨を見て「あれはなんなの」と聞いたとき、「タイプロン」といい、それから「鯨が……」といい直して、事の次第を給仕が説明しようとする間もなく「鯨の尻尾ってあんな立派だったのねえ」と女は早合点し、連れの男もこれに相槌をうって答える。物見高い旅行者の態度は、真摯な実存者に儀式の心を培う「ラ・マル」こそ真の生活の場と考える老人には無縁なものである。旅行者が奇妙な感

嘆をしているとき、老人は自分の小屋で眠り込んでライオンの夢をみているのだから。老人のこの姿勢は弛緩した日常性に背を向けるだけでなく、そこに埋没した生命、あの原始的生命の活力を無言のうちにわれわれに伝えているといえよう。

☆

『老人と海』は日常性に埋没した人間固有の生命力を本来の姿において回復するために日常的価値、あるいは共同体が個人に対して従属を強いる上位的価値に背を向けたところに立っている。いかなる拘束からも自己を解き放ったとき自己自身を開示するのは無に対してである。このとき自己の存在自体が偶然となる。主人公の老人サンチャゴがこの偶然の世界、無方位空間にあって“待つ”態度を固執し得るのは偶然を生きることすべてを賭けたことにほかならない。したがって偶然とともに生の現在性が、未来にあるいは実現すべき目標に投影された現在性ではなく、現在あるがままの現在性が喚起される。というのも現在に生起する偶然性が彼の生自体となるからである。『老人と海』の新鮮さはメタフィジカルな世界観と訣別することによってのみ回復可能な偶然の人間的意味の発見によるものということができるであろう。ヘミングウェイの抱いていた抽象的なものに対する生理的嫌悪と不信の感が伝統的なメタフィジカルな世界の重圧からフィジカルな世界を、プリミチヴな生命を回復しようとする意図と根底で結びついていることは疑いない。

老人の“待つ”人生哲学には彼のリゴリズムが密着している。これが『老人と海』の倫理的基調をなし、老人の素朴な生命観を肉体的思想にまで高めている。それは、ルールの権威と遵守精神だけが行為を行為ならしめることによって、また老人が少年とともに野球に深い興味を示すことによって明らかであろう。彼のこの心性こそが行為を目的と方法との認識上の区別から救い、行為の完結性自体に意味を惹らし、行為を儀式として成立せしむるものである。この種の心性が失われたところに儀式はあり得ないし、緊迫した生はない。原始的生命の復権を目指し、肉体的側面から人間存在の意義を見直そうとするところに『老人と海』の今日的意味があるといえよう。